

〈実践報告〉

## 学校や地域社会における農作業体験学習の意義

—「信大茂菅ふるさと農場」での実践を通して—

海沼正典 更埴市立八幡小学校

土井 進 信州大学教育学部教育科学講座

### A Consideration on the Vision of Agriculture Education in Elementary and Junior High Schools

KAINUMA Masafumi:Yawata Elementary School, Koshoku City

DOI Susumu:Faculty of Education, Shinshu University

In order to assist educators in improving or developing contemporary, comprehensive curricula in the field of agricultural education, we will introduce part of our experimental agricultural education program at Mosuge School farm. Agriculture teaches student not only how to grow plants, but also how to cooperate in groups. The practice of integrated studies is widely spreading now in Japanese schools, so there is more call and time available for agricultural studies than ever before. As educators, we need to assist students in better understanding agricultural concepts and their application to agriculture. It is our hope that educators can, with the aid of this plan, achieve this purpose.

【キーワード】 信大茂菅ふるさと農場 農作業体験学習 オーナー制 グループ制

#### 1. はじめに

筆者は平成12年度に長野県教育委員会から内地留学生として信州大学教育学部に派遣され、農作業体験学習を「総合的な学習の時間」に取り入れるためのカリキュラム開発について研究した。本稿では農作業体験学習のもつ人間形成的意義と実践にあたって配慮すべき点について、「信大茂菅ふるさと農場」での初年度の実践を通して考察する。

#### 2. 農作業体験学習

##### 2.1 農業と教育

先ず、農業及び農業教育の学問上での広がりを見てみたい。我々の住む自然界においては、太陽のエネルギーを利用した光合成によって成長した植物は植食動物の餌となり、植

食動物は肉食動物の餌になる。そして、植物、動物の死がいや排泄物は土壌微生物の餌になり、土壌微生物の分解作用でできる無機養分は再び植物に利用される。即ち、太陽の光エネルギーを土台にして様々な物質が規則正しく循環している。農業は本来このような循環の中で行なわれる営みのことであって、また英語の“agriculture”は、作物に不可欠な養分や水分を供給する土を中心として発展した学問である。従って、我々の命を養う根源的な使命を背景に、この分野の論文やレポート類はこれまでに数多く発表されていて、教育関連の最大データベースを有する米国連邦立 ERIC (the Educational Resources Information Center)でも、様々な角度から農業についての資料を探ることができる。

一方、農業教育“agricultural education”は比較的未開拓の分野であるためか、ERIC シソーラス上に大きな広がりは見られない。しかし、関連した論文や記事が同名の学術雑誌からデータベースに取り上げられている事実もあり、その重要性は十分認知されていることがうかがえる。

## 2.2 国策としての農作業体験の推進

では、国のレベルで農業教育はどのように扱われているのだろうか。次はインターネットで各省庁のホームページより該当する箇所をピックアップしたものである。

【文部省（現在の文部科学省）】

中央教育審議会答申

21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）

平成8年7月19日

第3章 これからの地域社会における教育の在り方

(1) これからの地域社会における教育の在り方

(自然体験活動の推進)

子供たちに、自然の中における様々な生活体験や自然体験などの機会が不足している現状を考えると、農作業体験、野外活動や環境保護活動など、子供たちに豊かな自然に触れさせ、自然に対する理解や愛情を育てるような子供・親子向けの事業を充実させることは、今日極めて重要なことである。

2000年12月

新しい時代における教養教育の在り方について

(中央教育審議会 審議のまとめ)

### 1. 生涯にわたる教養教育

少子化や都市化の進行、また、高度情報化の影の部分としてのいわゆる仮想現実感（バーチャリアリティ）の肥大などの中で、人間や社会、自然を直接体験する機会が減少してきていると言われる今日、そのような機会を社会全体で教育的配慮の下に人為的に作り出していくことが必要である。子どもが自らの血となり肉となる教養の基本を身に付けていくことができるよう、学校、家庭、地域の連携の下に、自然体験や社会体験、奉仕体験

を含めた様々な体験活動を充実しなければならない。

【農林水産省】

平成 11 年度 食料・農業・農村の動向に関する年次報告

平成 12 年 4 月

第 1 部 食料・農業・農村の動向 概要

第 I 章 食料の安定供給確保

第 1 節 我が国の食料消費・食生活

(3) 子ども達の「食」を考える

④ 心身の発育段階にある子ども達にとって、毎日の食事は、栄養摂取の面で重要であるばかりではなく、将来の食習慣の形成や健康維持、食文化の継承等にも大きな影響を与える。子ども達の「食」に関する関心を高め、知識を深めるため、農作業体験や調理体験等、子ども達自身の経験として身に付けられるよう各般の取組みが必要。

⑤ 子ども達に対する食教育については、関係省庁間の連携や関係機関、家庭、地域等との連携により学校教育の場はもちろん、それ以外の場においても積極的に推進することが重要。

また、栄養や健康面、「食」についての学習だけではなく、農業や「食」に関係する流通・加工業の大切さや、農業体験・生産体験といった実際の体験をとおして働くことの大切さ等を教えていくことが必要。

第三章 農村の振興と農業の有する多面的機能の発揮

第 3 節 農村の総合的な振興

3) 都市と農村との交流等の促進

ア 都市と農村との交流

① 国民の意識が「物の豊かさ」から「ゆとり」や「やすらぎ」といった「心の豊かさ」に重きを置くようになるなか、都市と農村との交流が活発化。

しかし、目的と効果にギャップがみられるなど、交流活動の運営には多くの課題が存在。

② 都市と農村との交流については、国民の農業や農村に対する理解を深め、健康的でゆとりのある生活の実現に資する取組みとして、一過性ではない長期的観点に立った活動が必要。今後は、都市住民のニーズを踏まえた魅力ある地域づくりに向け、ソフト・ハード両面からの条件整備が必要。

イ 農業体験及び農業体験学習

① 人格形成期にある子ども達の自然体験は、豊かな心を育み、道徳観・正義感を身につけさせるものとして教育の場においても情操教育の面から注目。

② 農業体験は、貴重な自然体験となるばかりではなく、子ども達の農業に対する理解の醸成や将来の担い手確保の観点からも重要な取組みとして期待。文部省や関係機関との連携のもと、積極的な農業体験機会の設定や体験内容の工夫等、取組みの一層の充実が必要。

以上見たように、当然のことではあろうが、文部省（文部科学省）より農林水産業のほうが一歩踏み込んだ表現を用いて、農業・農作業体験を奨めていることが分かる。しかし、いずれにせよ生命の尊さを忘れてしまったかのような殺伐としたニュースが、目新しく思われなくなっている現在の状況では、この種の体験の必要性は一段と高まっていると考えられるのである。

日本では、近代教育の夜明けともなる明治維新を経て、政府の最大の課題は、当然のことながら欧米列強の外圧に対抗できる国力を早急につけることにあった。そのためには国家の体制を整えつつ、鎖国によって立ちおくれた文化や技術を急激に押し上げなければならず、必然的に十分な準備をする間もなく、水門を開いて水を呼び入れるように、産業革命の波を受け入れたのだった。学校においては、工場での生産性を高めるための労働者の輩出が第一義となる。児童生徒は、生活のリズムを工場のリズムに合わせることを強制され、利潤を追求することが至上の目的であることを教え込まれた。また、それまで農業の収穫物で生計を立てていた大多数の農民は、都市部に出て工場の労働者となり、賃金で生活するようになっていった。このような過程を経ていくなかで、地域社会においては、家族、地域共同体の解体が進み、必然的にこれらが持っていた教育力は失われていったのである。現在、不登校の子供などを対象とする、従来の学校の枠に入らない学びの場は、全国で約500カ所あるが、行政による支援はほとんど受けていない。また不登校の小中学生は全国で13万人以上になる。しかも、その数は小子化が進んでいるにもかかわらず、この25年間増え続けている。即ち、この不登校の問題に代表されるような教育の諸問題は、我が国においては明治維新を迎えた当時から、学校はその根源を抱えていたと考えられるのである。

### 2.3 小中学校における農作業体験学習の実情

小中学校における農作業体験学習は、これまでも教科や特別活動の枠の中で様々な形で行われてきている。ただ、それは大変限られた時間内のことであって、内容は断片的、一斉的、そして筆者自身の反省点も含めて、かなり強制的に進めざるをえない実情がある。このため農業に親しむ心情を育てるところか、農業離れを促すような結果を招いてきたのではないかということが懸念されるのである。実際、「信大茂菅ふるさと農場」での農作業に関わってきた学生からは、次のような感想が出された。

- ・サツマイモを育ててみて、つると葉がこんなにも強く地を這っているのを見て驚いた。小学校のときは苗を植えておいたら、土の中から大きなイモが出てきたという感じだった。
- ・農作業をほとんど経験したことがなかった私は、野菜の作りかたも知らなかったし、どのように実るのかも漠然としかわからなかった。小学校のとき授業で習ったり、畑に実っている野菜を何度も見たことがあるはずなのに、覚えていないのだ。やはり受身的な姿勢で聞いていたり、何となく見ているだけでは全然身につかないということを感じた。
- ・自分で畑を作るなんて初めて。クワを持つなんてもちろん初めてだったので、畝の作りかたなんて全然わからないまま農作業がスタートしました。「畝って何？」から始まり、

「種はどうするの?」「どれくらい蒔けばいいの?」といった感じで分からないことだらけ。友達に聞いてなんとか種蒔きまで完了しました。最近の若者って、本当にこういう事を知らないなと身を持って実感しました。

・僕は田舎育ちで、実際家の周りにも畑や田んぼがあるにもかかわらず、特に畑作業の手伝いを今まで一度もしたことがありません。今こうして親元を離れ、違う土地にきて（長野も実家のある能登も自然に恵まれている点では共通しますが）思うのは、やはりあれだけの自然に恵まれているがらどうして農作業のこと、花の名前、魚の名前などを知らないのだろうということです。…「どうしてもっと素晴らしき能登の自然、しかも家の周りにある身近な自然に目を向けなかったのか」という悔しい思いがあります。地元のことについてあまりに無知なのは情けなく、恥ずべきことなのですが、その無知さをさらけ出す結果になるとしても、そういうレベルの話ではなく、実際に自分の手で作物を育てる体験をしてみたい、そういう気持ちでこの授業を受講しました。

これらの学生の感想は、今日の我が国の青少年がいかに家庭や学校で農作業の体験学習をしてきていないかを如実に物語るものである。

#### 2.4 地域住民の農業への想い

信濃毎日新聞（2001年1月7日）の読者の欄「建設標」に掲載された、50歳の男性からの次のような投稿が目にとまった。長くなるが引用することにしたい。

「高齢のため父が畑で野菜作りをしなくなってからだいぶ経つ。その間、私は田畑に見向きもせず自分の仕事だけをしてきた。父にしてみれば、ご先祖様から引き継いだ田畑が荒れていくのを見るのは忍びなかったのであろう。年金の中から金を出し、人を頼んで、春、秋の二回、田畑が荒れないように耕してもらってきた。病気がちな私ではあるが、二十一世紀を機に、父に代わり野菜作りを始めようと思っている。今、野菜などは手間暇をかけて作るよりは、輸入ものの方が余程安価で見た目もよい物が手に入る。新聞などを見ても輸入野菜は増え続けており、自国の農産物に打撃を与えているという。このままでは日本の農地が荒廃の一途をたどっていくことは目に見えている。高齢化社会を迎え、今まで農業に従事していた人たちが手を引いてしまえば、日本の農地はどんどん減少してしまうのではないだろうか。私は自分の家だけでも野菜は自分の手で作ったもので賄いたいと思う。父が健在の間に、すべての知識を教えてもらおうと思っている。」

この記事は現在の我が国の田畑が置かれている状況をよく言い表しているのではないだろうか。農林水産省構造改善局の支援を受け（財）日本農業土木総合研究所を含めた粗放管理検討委員会が行なった調査によると、平成4年の農地法施行令改正時の構造改善局通達で管理のための耕作が提起されたにもかかわらず、農地の荒廃化はその後平均5ha/年のスピードで急速に進行している。平成10年度では、生産調整以外の遊休農地は、12万ヘクタール程度にも及ぶと推定された。日本の農地面積が1960年代に約600万ヘクタールに達したのを最高に、その後30年間でほぼ100万ヘクタールが減少し今後も同様の傾向をたどることが予想され、現段階の農地面積は、実に明治初期の水準に近いという。

同委員会は更に次のような指摘をする。農地（特に水田）は、適切な管理によって初めて機能を維持し続ける。農地を放置した場合、荒廃農地を復旧するには耕起、伐木、草刈り、これに水田では畔作り、水漏れ対策、水路の修復等の手間がかかることになる。水田の復旧費用は年を追って開墾費に近づく。また、農地荒廃率が3割を越えると集団的な基盤整備を伴う復田化はほとんど不可能となる。こうしたことから、我が国において農地資源を保全するには、継続的な維持管理を地域的なまとまりを持って行なうことが不可欠の条件となる。

この極めて単純明快な結論は、将来の日本の姿を考えるうえで、2つの貴重な視点を与える。一つ目は、継続的な維持管理を可能にする人材を育成し続けていくこと。二つ目は、地域社会の活性化である。「信大茂菅ふるさと農場」での実践は第二の視点に立脚しているものといえる。

### 3. 「信大茂菅ふるさと農場」での初年度の実践

#### 3.1 農場オープンまでの経過

平成6年度から、学生の自主的な活動として始まった「信大 YOU 遊サタデー」の一環として、平成12年度より地元のJAながのを通じて、長野市内茂菅地区に遊休農地（水田3aと畑3a）を借り、農作業体験に挑戦することにした。それまで単発的なイベントに終わりがちだった通称“YOU サタ”に、大自然の中で継続的に行なえる活動を取り入れたいという願いを持ち、前年度のうちにJA長野中央会を3度訪ねて実施に漕ぎ付けたものだ。また、このチャレンジは、現在多くの小中学校で試行されている「総合的な学習の時間」について、学生に学ぶ場を提供することにもなった。「信大茂菅ふるさと農場」での農作業体験を通して、「総合的な学習の時間」を構想する力を身につけることをねらいとして開講された授業科目「自然体験研究特講」(前期)には39名、「自然体験研究演習」(後期)には42名の学生が受講した。

大学の時間割の中には位置づけない集中講義方式のこの授業では、ミーティングを昼食時間や授業後の集まりやすい時間帯に取らなければならないといった変則的な面もあり、教室での一斉授業に馴染んだ学生には、当初不安や戸惑いの様子が見られた。

#### 3.2 農作業体験学習の実際

##### (1) 問題の所在

この活動を通じて畑の作業方法が問題として浮かび上がってきた。前期は、学生が何を栽培したいと思っているかをアンケート調査し、希望する作物の種類ごとに班分けし、各々のグループで責任者を決めて自主的に作業を進められるグループ制を取り入れた。すると活発な活動が初期の段階で見られたものの、熱心に畑に通う学生が徐々に限られてきたり、一部の学生に負担がかかりすぎてしまったりした。そこで、後期は作業方法を一変してオーナー制に変更し、一坪程度の土地を初めから学生一人ひとりに分配する方法をとった。これら2つの方法を試みたことは、図らずも学生が農作業体験学習の意義について考える

きっかけとなった。農作業をグループ制で行うか、それともオーナー制で行うかは、小中学校での実践においても考慮しなければならない課題である。

## (2) 研究の目的

学校のカリキュラムに農業を取り入れるとき、作物によるグループを作り、責任者を置いた小集団で取り組む場合と、作物の選択から収穫まで、全て個人の責任で行なうオーナー制を取った場合とでは、経過や結果にどのような違いが生じたかを明らかにする。また、農作業体験学習によって学生の意識にどのような変化がみられたかを明らかにする。

## (3) 研究の方法・内容

「信大茂菅ふるさと農場」での農作業体験学習に参加した学生のレポートを分析し、作業方法の違いによって生じたと考えられる部分を抽出し、一覧表にまとめ比較検討する。

### ① 前期と後期に栽培した作物の種類

#### グループ制（前期）

稲班：うるち米（コシヒカリ）、もち米

豆・トウモロコシ班：トウモロコシ（一般、ポップコーン用）、大豆

いも類班：じゃがいも、サツマイモ

その他の野菜班：トマト、ミニトマト、キュウリ、ナス、ピーマン、しし唐  
しそ、かぼちゃ、スイカ、レタス

#### オーナー制（後期）

大根、二十日大根、ラディッシュ、ほうれん草、春菊、いちご、チューリップ、

ねぎ、れんげ草、野沢菜、スナックえんどう、チンゲンサイ、エンドウ、たまねぎ

### ② 授業者及び学生の立場から見たオーナー制とグループ制の特徴（表1を参照）

### ③ 授業後の学生の感想

・作物栽培の大きな利点は、時の経過とともに様々な問題点を知ることができ、またその一つ一つが自分の実生活とも深くつながりがあるということ。

・この体験が、子供たちに「自然から学ぶ」ということ意外に重要なことを教えてくれると思います。私を感じたそれは「自然から感情をいただく」ということです。こういった体験で得られる様々な感情(雑草取りに苦労したこと、雨を願ったこと、収穫を喜んだこと、他人に畑を荒らされて怒ったこと、自然の素晴らしさを感じたことなど…)は、刺激となって子供や私たちの生活に大きく影響するでしょう。

・作物を育てるようになってから私自身が変わったことがもう一つある。それは、「いただきます」「ごちそう様」という言葉の重みだ。今までは何気なく言っていたこの言葉だったが、農作物を作るようになって、楽しさだけでなく、その大変さも知り、食事をする時は何かしらそういうことを考えるようになった。

・この授業を受講して、私は生まれて初めて自分たちの畑を持つことになった。(中略)何より先ずあの肥料(堆肥)の臭いと、肥料に触れてそれを土に混ぜ込むという作業に慣れなくてはならなかった。最初はどうしても肥料は汚いものだと思ってしまい、抵抗があった

表1. グループ制とオーナー制

対象	方式	メリット	デメリット
授業者 (評価者)	グループ制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作物の種類、成長段階がわかりやすい。</li> <li>・援助がしやすい。</li> <li>・収穫がやすく、利用方法について意見を反映しやすい。</li> <li>・カボチャやスイカなど、広面積を必要とする品種が作れる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人の、作業内容、作業時間が分かりにくい。</li> <li>・個人の課題に対応した支援がしにくい。</li> <li>・個人の評価がしにくい。</li> <li>・作物によっては資材の購入を考えなければならない。</li> </ul>
	オーナー制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人の興味、関心を把握しやすい。</li> <li>・適性を含めて個人の評価がしやすい。</li> <li>・個人に支援しやすい。</li> <li>・収穫物の利用について、考慮しなくてよい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・線引きなど事前準備に手間がかかる。</li> <li>・丈夫な名札を作る必要が出る。</li> <li>・道具の管理がしにくい。</li> <li>・作れない者への手立てが必要になる。</li> </ul>
学生 (被評価者)	グループ制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話をしながら楽しく活動できる。</li> <li>・気軽に相談できる。</li> <li>・友達と協力できる。いっしょに畑に行ける。</li> <li>・当番制で作業できる。</li> <li>・収穫物を使った企画ができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人に頼ってしまう。</li> <li>・他のグループの作業に関われなくなる。</li> <li>・属するグループの作物しか収穫できなくなる。</li> <li>・人間関係で不満が溜まりやすい。</li> </ul>
	オーナー制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の好きなものを、好きな時に植えられる。</li> <li>・収穫物を、個人で利用できる。</li> <li>・好きな作物の育て方を研究し、実行できる。</li> <li>・人の畑と比較できる。</li> <li>・作物に愛情が持てる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作業が、楽しく思えない。</li> <li>・情熱が冷めやすい。途中で放れる。</li> <li>・失敗した時のショックが大きい。</li> <li>・助け合えない。</li> <li>・不安が大きい</li> </ul>

が、だんだん回数を重ねていくうちに慣れることができた。

・一回、畑に手をつけた以上は途中で止めてはいけない。全てを収穫し、次にすぐ使えるように畑をならすところまでが続きの作業であると思う。今回、皆でやるはずだったのが、班を決めてしまったことで、いつのまにか担当の作業だけをやるようになってしまった。“その他の野菜班”と、トウモロコシ・豆班で同じ日に水遣りを別々に行なってしまうことがあった。田んぼばかりが大変な作業になったり、“その他の野菜班”ばかりが収穫物を得ていたり。班では、作業内容を決めるだけで作業自体は皆でやりたい。

・私にとって、稲やソバ、野菜を育てることは未知の世界である。(中略)農業体験を通して大変有効な方法に気づいた。それは、“その道における達人から教えを受けることである。私たちが田植えやそばの種蒔き、その準備などをするとき多くの達人が力を貸してく

れた。この方法の良さはただ単に情報、知識を授かったり、技を指導してもらえるだけではない。何よりも、教える側と教えられる側のコミュニケーションを産み、人間関係を築くきっかけとなる。これこそがこの方法の一番の魅力ではないか。

・ 自分で、何から何まで世話しながら育てることで、今まで知らなかった事実や陰の労力を知ることができ、本当によかったと思います。「ものを作る」大変さを学びました。大体は順調に育ち、美味しいものが収穫できた中で、失敗したものがありました。スイカとレタスです。原因は雨にあったと思います。大事に育てて、成長を心待ちにしていた作物が断念せざるをえない状況になって、とても大きなショックでした。私たちがさえ、こんなにも悔しい思いをするのだから、生きるための糧として農業をしている人たちならば、それはそれは大変なことだろうと感じました。今回の実践を通して本当に天災の恐ろしさがよく分かりました。

・ 子供たちとの触れ合い活動を通して、比較的におとなしいイメージ持ったのですが、それは、子供たちが、学年差を越えて共に仲良く活動することがなかなかできていなかったためであろうと思います。特に高学年が兄弟以外の低学年の世話をするのが少なかったように感じました。この状態を打破するには、私たち信大生の子供たちへの関わり方を変える必要があります。「リーダー」役から「見守り・補佐役」へと「異学年交流」を成功させることを次の課題としたいと思い、子供たちの「学ぶ力」に貢献していきたいと思います。

・ サツマイモは6月10日、茂菅の子供たちと一緒に植えた。苗の先端を斜めに切っておくこと、植え方にも色々な種類があること、植えてから根が張るまで水をあげなければならないことなど、こちらも知らないことばかりだった。小学校や中学校でもサツマイモは植えたはずなのに、植え付けと収穫のことしか記憶にない。これはその間の過程を先生がやっていたということになるだろう。

・ 収穫の時がきました。トウモロコシは50本以上の収穫ができ、しかも粒ぞろいで実がぎっしりとつまったものでした。先生方にも大変好評で、私も4本貰ったうち3本を実家に送りました。祖父から電話があり、「とても美味しかったよ。自分たちで作ったものとは思えんくらい。また美帆が作ったもんやと余計に美味しいわ」といわれました。(家庭に)コミュニケーションも生まれ、子供たちが作ったものだからと思えば粗末にすることもないと思います。

#### (4) 考察

表1. では、両方法ともにメリット、デメリットが出ているが、二者を選択させると学生は圧倒的にグループ制を支持した。それは何故なのか。

後期のオーナー制は、個人個人の目的意識がはっきりしていて、メンバーがそれほど人との触れ合いを求めている場合に有効であった。このことは前期、その他の野菜班の中にも認められ、「収穫物を使って地域の人たちと関わりたい」とするメンバーと、栽培自体が目的であって地域のことは考えないとするメンバー間で意識のずれを生じていた。

一方、前期のグループ制では開始時の確認事項として、作業はグループの枠を越えて行

なって、収穫物も皆で分配するとなっていたにもかかわらず、感想にも表れているように次第に所属する班の作物しか面倒を見なくなったり、責任を感じて自主的に作業する者と畑に出向くことすら億劫になる者に分かれてしまったりする等、問題が露出した。ところがいざ方法を選択させると、このような不満や問題は隠れ、皆で作業したときの楽しかった思いだけがクローズアップされてくるのである。次年度の新プロジェクトを企画する話し合いでも、畑の利用方法としてオーナー制を希望する意見は皆無で、今回の結果を裏付けている。即ち、農作業体験学習を通じて学生が会得したものは、農業の知識そのものより人と協力し喜びを分かち合う心根であったと言えよう。

多くの矛盾や不満を感じながらも、集団での活動を農作業体験学習に期待する学生の姿は、農業をカリキュラムに取り入れる場合、友達や地域の人たちとのふれあいを含んだ活動が大きな魅力になることを教えてくれた。

また残された問題として、個性重視という視点では、個々の児童生徒が独創性を発揮した作物づくりに挑戦していくことが望ましいと考えられるが、今回は集団の農業を志向する結果に終わってしまっている。そこで、例えばオーナー制でも活躍できる人材づくりを幼いうちから如何に進めるかといった、より基礎的な研究に取り組んでいくことはこれからの大切な課題であろう。

#### 4. おわりに

「信大茂菅ふるさと農場」という場に、学生や JA 関係者、地域の子どもたちとその保護者が集まり、土づくり、作物づくりを通して食文化を話題にしたコミュニケーションの輪が広がった。日本人の心からまだ土に親しみ自然に語りかける豊かな人間性は失われていないことを実感することができた。来年度から完全学校週五日制が実施されるが、遊休農地を活用した「教育農場」が全国各地に開設されるならば、休日ごとに親子が訪れて農作業体験を通して人間性を回復することが期待できる。また、既に崩壊しつつある地域教育力も蘇生することが期待できる。時間はかかるであろうが、百年の計として農業を地域社会の生活に取り込み、土づくりによる人づくりの道を一步一步切り開いていくことが重要であると考ええる。

#### 【参考文献】

- 小川清・武川政江（1993年）『野菜づくり40種』主婦の友社（東京）  
柴田義松・竹内常一・為本六花治編（1977年）『教育学を学ぶ』有斐閣選書（東京）  
土井進（2001年）「信大茂菅ふるさと農場と信大牟礼ふるさと農場の創設」『信州大学教育学部 学部・附属共同研究報告書』  
山崎保寿（1999年）「総合的な学習に関する短期集中型モデルの構成」『教育実践研究指導センター紀要』第7号 信州大学教育学部附属教育実践研究指導センター